

平成24年度県新規採用職員・基礎研修 知事講話

平成24年4月9日 10:10～11:10

於：職員人材開発センター 講堂

みなさんこんにちは。私、鳥取県知事をしています平井といいます。

皆様と今日こうして一緒に写真を撮りましたけれども、初めてお会いした方も多かろうと思います。先日、知事部局の方には、辞令交付をさせていただきましたけれども、今日は教育委員会、産業技術センター、共済組合とか他の部局の方もおられます。是非、皆様の前途洋々たる未来が広がっていくことをご期待を申し上げたいと思います。

そんなに固くならなくても結構でございますので。これから私たちは仲間になります。一緒に県政を運営していくという意味でのパートナーになるわけであります。皆様のご入庁を心からお祝いをしたいと思います。さっきも写真を撮りましたけれども、暖かくなりましたね。ようやく春めいて来たわけございまして、折しも入学式でしょうか近くの小学校から歌が聞こえて来まして、少しほのぼのしましたけども、1年生になったら友達100人できるかなと、今日は93人集まっています。こうして新しい仲間がこれからできるのではないかなと思います。

こうして春のうらかな日を迎えるわけですけども、それぞれに色んな思いを持って県庁、あるいは教育委員会という職場もありますが、そうした職場に入ろうという志を持ったんだと思います。みなさんは、これから社会の一員として、成長していかなければいけないわけでございます。今まで社会で活躍されて、社会人採用の方もいらっしゃいますけども、多くの方が学生からこちらの方に来られました。そういう意味で、色々な思いがあると思います。また、社会からこちらの方に転入されてこられた方々も、ご自身の思いというのがあると思います。それをですね、少し聞かせていただければなと思います。私の話に入る前に、どのような思いで鳥取県庁の扉を叩いたかということを開かせていただきたいと思います。当てさせていただきますので、悪く思わないでほしいんですが、何人かですね、お話を聞きながら、これから一緒に県庁生活ということを考えてみたいと思います。

私の場合を申しあげますと、やはり公務というのが良いかなと思ったんです。お金儲けとか一企業の利潤を最大化するというよりは、何か人の役に立つような実感が欲しかった。一生掛けてそんな仕事をしたいなという思いから、入ったわけでありますが、みなさんは、どういうことを描いておられるでしょうか。

それではですね。そんなにシーンとしなくても結構でございますけども、では総合療育センターの青田さん、いらっしゃいますか。

(総合療育センター 青田保育士) 私は、学校で保育の勉強をしていて、普通の一般的な子どもとは違って、発達障がいを持った子どもや、病気を持った子どもの保育も勉強してきて、それは、民間の保育所じゃなくて、こういった公務員とういか公立の保育園であったり、県立の施設であるところで、保育をしていきたいと思ったからです。

(平井知事) ありがとうございます。それでは、次に雇用人材総室の松田さん、いらっしゃい

ますか。

(雇用人材総室 松田係長) 雇用人材総室の松田です。私は民間からの中途採用になりますが、この度、鳥取県に20年ぶりに戻ってくるかたちになりました。やはり、家族と一緒に暮らしたいというのと同時に、地域とつながりをつくりながら、これからは県民のためという視点から頑張りたいと思ひまして、入りました。

(平井知事) ありがとうございます。それでは、日野農林局の山根さん、いらっしゃいますか。

(日野農林局 山根農林技師) 私は大学の4年間で農業土木を学んできて、それを社会のために活かしたいと思ったとともに、鳥取出身で、長年鳥取にお世話になっておりますので、それを仕事で還元していきたいと考えたことから志望しました。

(平井知事) はい、ありがとうございます。それでは、教育委員会の埋蔵文化財センターの奥原さん、いらっしゃいますか。

(埋蔵文化財センター 奥原文化財主事) 埋蔵文化財センターの奥原です。私は、鳥取の出身ではなく島根県出身なんですが、埋蔵文化財の仕事は狭き門というか大きな募集がないところなんですが、是非山陰の方で働きたいと思って志望しました。また、埋蔵文化財の仕事は、大学で考古学を勉強してきました選んだ職業なんですが、文化財というのは地域の方がすごく大事にしておられる財産でありますので、それを発掘をとおして地域の皆さんに知っていただいて、より地域を大事にさせていただくということを職業として入りたいと思ひまして、希望しました。

(平井知事) ありがとうございます。今、4名の皆さまから思いを語っていただきました。青田さんの方からは、保育士として仕事をするわけですが、勉強のなかで発達障がいとか障がい児の問題に非常に興味を持たれたんだと思ひます。鳥取県でも総合療育センターというところがございまして、これは、全国的にも非常に誇れるような施設だと思ひますけれども、子どもたちが重度の障がいに悩んでいる。こういった場所を自分のこれからのフィールドワークの場としていこうということだと思ひます。人間として、これから人生を送るわけですが、非常に厳しい状況におかれている子どもたちのために、自分の人生を捧げてみたい。そういう思いだったというふうにお伺いしました。

また、松田さんの方からは、20年ぶりにふるさとに帰ってきて鳥取の方で2年間過ごされた。それで県庁を受けられたということだと思ひますが、やはり地域とのつながりを大切にしたいとそれを生業にしていきたいと、こういうお話をいただいたわけでありまして。鳥取を離れる人というのは非常に多いわけで、学生のときに鳥取以外の大学に行かれる方は非常に多い。それで皆さん帰ってくれば、鳥取の人口は減らないんですけども、現実には行って帰ってこれない人の方が、ここ数年はずっと多かった。けど、最近ようやく社会減から社会増の方に転じつつありまして、都会が住みづらくなってきたんだと思ひますね。そういうことで、松田さんも、家族もおられて一緒に暮らされるということでこちらの方に来られた訳でございまして、そのような方が段々と増えつつあるということだと思ひます。そうした中で、ただ地域の方々と仕事をするよりも、地域に役立つ仕事をしてみたいと、そういう豊富を語ってくれました。

また、日野の山根さんからは、農業土木の勉強をしてきたということでありまして、その農業土木について自分が生まれ育った鳥取というところに還元をしていきたいと、自分が学んだことを返していきたいとそういう思いを語られました。

そして、最後に教育委員会の奥原さん、隣の島根県、同じ山陰のご出身でありますけども、考

古学ということを活かしていきたいと。これは古い昔の財産、県民みんなの、地域の財産であって、そういうことをもっと大切にしてもらおう、そんな鳥取県にしていきたいと、こういう豊富を語っていただきました。

世に言う“青雲の志”という言葉があります。なにかいっばしの人間になろうというときに、中国では科挙という試験を受けると、これが非常に難しい試験でありまして、なかなか20、30歳で受かるものではなくて、40になったとかそういうことでなんとか、そうやって難しい試験を通して、これから国の中で働いていくんだと、こういう志のことを指したところから始まるんでございますけども、“青雲の志”という言葉があります。

今皆さんが語ってもらったのは、まさにそういう志だと思います。それぞれ色んなバリエーションはあると思いますが、鳥取の県庁を受ける、教育委員会なども含めて、公的な場で働こうと思ったことには、やっぱり意味があると思うんです。そのことを是非大切にしてもらいたいなと思います。私自身もいまこうやって知事をやっていますが、もともとは公務員からスタートしています。公務員になったのは、先ほども申し上げましたように、公の方でした方が自分に合ってるのではないかなと思いました。自分のことを申し上げますと、大学の時にボランティア活動をしてたんですね。日本赤十字だとか、法律の無料相談なんかもやってました。お金儲けをすることよりも、一人一人の人と向き合って仕事をしていきたいなど、他人の幸せのなかに、自分以外の人の幸せの中に、自己実現できるような気がしました。そんなような思いを持って、元は総務省、前は自治省だったんですけども、兵庫県とか福井県だとか鳥取県だとか色々とまわりながら仕事をしていったわけでありまして。やっぱり現場に出て行って、初めて分かることってあるんですね。閉ざされた空間の中でもって、それで分かった気になっているのは失敗だと思います。また行政としても大失敗だと思います。皆さんが入られたところは、外界である住民の皆さま、地域の皆さまと実はつながった空間なんですね。そのことを大切にしたいなと思います。今日、皆さんの方にお話をさせていただきますけれども、是非、今日の“青雲の志”ということこれから一生忘れずにいて欲しいと思います。ちょっと難しいことがあったり、「ああこれ嫌だなあ。」ということがあったとしても、自分の思いというのを、最初はこういう思いだったなあということを思い出していただきたいというふうに思います。

今、日本は大変な状況にあるんだと思います。パラダイムシフトが起こっていると、私は思います。それはどういうことかという、今まで、昨日まで、去年まで、十年前までとは全然違った世界に、変わり始めているんですね。その良い例が、東日本大震災だったと思います。

去年の3月11日、大変な地震がありました。大津波が起こりまして、多くの人々の命を奪うということになりました。私自身も3月11日、そのとき記者会見をやっていたんですが、記者さんと話さないといけない場がありまして、記者会見をしていました。そのときにメモがございまして、それで今の状況というのが入ってきた。鳥取はそんなに揺れはしなかったんですけども、その深刻さっていうのは非常によく分かりました。それで、部局の方に命じまして、情報収集しようじゃないかと、それで鳥取県としては応援態勢も組もうということをお話をしました。平成12年10月6日午後1時半というのも、我々にとって大切なタイミングなんですけども、そのときに鳥取県西部地震というのがありました。マグニチュード7.3でありまして、阪神大震災よりもマグニチュードとしては、大きな地震だったんですね。鳥取県の場合は幸いなことに、地域の絆がありましたから、埋まってしまった人も救出したりしまして、お一人も亡くなった方はい

なかったんです。だから、その後の震災対策を非常に意味スムーズに進めることができたかなあと思います。こういうギリギリの状況の中で、各地の皆さんから私たちも助けていただいた、そういう記憶があるわけでありまして。こういうようなことを考えてみますと、やはり今回は、我々が役に立たなければならない、それで、情報収集しようと話をしたんですね。ただ、なかなか情報が入ってきません。夜中の11時過ぎごろにようやくです、私の友人である村井さんっていう宮城県の知事さんと電話がつながりました。これは電話といっても普通の電話でないんです。行政無線っていうものが、この世界にはありまして、普通のNTTの回線とは違って無線で飛ばすような、そういう電話があるんです。それが宮城県とようやくつながりまして、村井知事は丁度そのときには、県庁の中が一時的な避難所になって、そちらの方をぐるぐると回られている時間帯だったということでおられなかったんですが、また30分後に電話がありまして、初めて村井さんと話をしたんです。「いや大変だねえ。」と、私、申し上げました。「これは、テレビの様子とか見るしかないけれども、阪神大震災よりもだいぶ大きな災害だねえ、我々鳥取県でこないだ平成12年に助けてもらったんで、ノウハウもあるし、職員のやる気もあるんで、いの一に我々からも支援申し上げたい。」ということをしたんです。村井さんは、「いやありがとう、助かる。」と、また、「今足りないものはこんなものだ。」って話もありました。「ただ、なかなか状況が分からない。」と、「平井さんが言うようにこれはとんでもない災害だ。」と、「まだテレビだとかで流れてないけれども、本当は太平洋岸はすべて全滅状態だ。」と、こういう風に言っていました。実は、調べに行こうにも入れないんですね。津波警報が出ていますから、二次災害の恐れがある。ですから状況の把握のしようがない。そのとき、皆さんもご存じのように気仙沼とか石巻とかの状況について、彼は“壊滅”という言葉を使っていたんですけども、その言葉の響きに戦慄を覚えました。これは容易ではないなと。鳥取県としてはいち早く、救援の物資を送り出した訳であります。宮城県の河北新報という新聞があつて、鳥取で言えば日本海新聞というような新聞と一緒になんですけれども、この河北新報の社説に、地方同士の助け合いというのは、すごい力だというふうを書いてあつたんですけれども、発災をしてその2日後には、鳥取県から物資が届いたという話を書いてあつたんですね。それほどに鳥取県はいち早く、支援を展開しました。もちろん救急のヘリコプターも行ってまして、私どもの防災ヘリも飛んでいましてですね、向こうで救助活動にあたりました。まず行ったのは石巻のあたりが最初のフィールドだったんですが、ビルの上から吊り下げようにして救助される人の映像があつたと思いますが、ああいうことをですね、鳥取県の職員もやっていた。それから、それから消防の緊急消防援助隊だとか色んなものが向かいました。私自身も3月20日ごろに宮城の方を訪ねました。それで石巻の避難所の方に行きました。避難所の方で話をさせていただいた責任者の方が、たまたま知っていたというか、お互い顔を見知っていた訳なんです。実は市の監査委員をしている市議会議員の方でいらっやいまして、鳥取のとりぎん文化会館での全国大会に来ておられたんですね。私もそこで講師をしていましたし、若干話をしたこともあります。避難所をまわって見ているときに、どこかで見たことあるなあと、向こうは向こうで、どこの誰がやってきたのかなと思ってた訳なんです。別に名乗って行っている訳ではありませんから。それで話をしていくうちに、あのときの知事さんかなという話になりまして、その後避難所の中なんかも回らせていただいたんですが、実はそこに鳥取県から保健師の派遣をしたんです。保健師の派遣をして、現場で衛生管理だとかのお手伝いをしていました。その保健師さんから現場で報告を受けまして、「感染症が広が

りやすい、だから、うがい薬だとかそういう基礎的な薬品を送ってもらえないか。」と、「直接送ってもらわないとどこでどうなるか分からないので、直接こちらの方にくれないだろうか。」と、そういうふうな話がありました。それで我々の方から薬関係を送らせていただきました。そして早速に活用していただきました。そういうふうになにかだがありまして、石巻の市長さんとも話をし、鳥取県からは市町村も含めて延べ千人くらい避難所対策で人を送り込んでいる。とても市役所で手が回らないということで、そうしたんですね。これも全国で初めて、うちが入りました。うちがやったあと、石巻に北海道だとかからも応援の人が来るようになりました。鳥取県としては、現場で困っていることがあれば、すぐに向き合ってやるべきだと、そういう信念を持ってやりましたので、なかなか職員の方への負担もありましたが、皆さんそれぞれ色々な経験を積まれて帰って来ました。嬉しかったのは、3月の末になりまして、教員採用で採用された方が境港の中学校の方に、実は宮城県の方から採用しまして、石巻で被災をした方がこちらの方に教師でやってこられたんですね。その方とお会いをして、激励をさせていただいた時に、私がそのような話をしたら、非常にその先生が驚いておられました。実は、鳥取県の出身ということに誇りを感じていると、それは石巻で助けに来たヘリコプターが鳥取のヘリコプターだったということが向こうで報道されてたんだそうです。それから避難所にいち早く薬が配られていたと、それも鳥取から来ていたということを知っていました。そういう事だったんですねと、ことごとく左様でありまして、今パラダイムシフトが起こって来ていますが、災害対策っていうのは行政の基本をもう一度呼び起こさせるものだと思うんです。現場に必要なことを実際にやっていく、そういうことが大切だと思うんです。

また、この東日本大震災を通じて“絆”っていうことが、クローズアップされるようになりました。地域のなかで結びあう、助け合う、その大切さ、当たり前なんです。日本では昔からやってきました。これがですね、ようやくここにきてその大切さにもう一度私たちは気付かされた。さらに命のことだとか、環境のことだとか、そうしたプリミティブな非常に原初的なですね、我々が中核におかなければいけない価値観というのがクローズアップされて来たんだと思います。安心・安全の価値だとかっていうことだだと思います。

環境の世紀といわれますが、環境のことでもそうであると思います。今では原子力発電だけでやっていく時代ではないと多くの国民が思うようになりました。特に鳥取県の場合は、身近なところにそういう危険がある。島根原発という存在がありますから。ですから、全国でいち早く中国電力という電力会社と安全協定を結んだんです。これは大議論になったんです。反対する人もいます。不思議なことに反対する人は、結構その原発の反対派の人たちなんですね。原発の反対派の人たちにとってこそ、こういう安全協定が必要なんじゃないかと思うんですが、ちょっと歪んだ形で、これはメディアとの関連があるんですけども、歪んだ形で結構動くことがあります。いずれにせよ、今ではこれを大議論して結びましたら全国からはこれを追っかけてきた。この度は福岡県が鳥取県の真似をして、ほぼ同じような安全協定を結びに行きました。こういうことで全国に対する大きな波を起こすことができていると思うんですが、環境の世紀といわれることがあります。

さらに産業構造が大激変を起こしている訳でありますね。アジアとの関係、どんどん企業は海外へ流出していく。超円高は回避されたかも知れませんが、まだ円高の状態は続いていて81円だとか82円というところでございます。こういうようなことで、企業の形も変わってくる、産

業の形態も変わってくるということを良く言われます。

さらに地域は衰退をしてくる。中山間地域、今ではですね、昨年調べてみますと40パーセントの高齢化率に中山間地はなってきたわけですね。それは、高齢化が進んできて、地域での機能が低下をし始めているということの現れでもあります。そういうようなことが起こっていたり、街中でも過疎が起こっていると。例えば米子市の中で中心、東倉吉町というあの辺が一番高齢化が進んでいるんです。不思議に思われるかも知れませんが、街中って今そういう状況になってまして、中山間地と街中のごく中心部のところに機能低下が起こり始めている。これは商店街のシャッター街化ということとして現れていることでもあります。こんなように色々な問題が生まれてきている。

さらに、国の中枢がおかしいです。決められない国政が生じているということがあります。衆議院と参議院とが別々の多数派になってしまったことから、だんだんとおかしな事になってしまった。自公政権時代に民主党が参議院の多数を取って、政権交代をしたんですけども、じきに参議院選挙がまたありまして、今度は民主党が参議院での多数派をとれなかった。そうやって衆と参との対立の構図がある、そういう中で決められない体制がずうっと続いていて、不幸なことにここに東日本大震災が起こる、海外への企業輸出がおこるような超円高の状況が起こっている。こんなことで、閉塞感が国民の間に高まっているんだと思います。

橋本さんという大阪の市長さんがいらして、元は私の仲間の大阪で知事をやってたわけでありまして、この度市の方に転政をされました。結構過激にやられるわけでありまして、私も一回喧嘩をしかけたことがありまして、去年実は骨を折って車いすに乗っていました。車いすに乗っている5月ごろですかね、急にマスコミの皆さんが騒ぎはじめまして、私のところに話しが来るわけです。記者会見をやってくれと、なんだろうかと思って調べてみると橋本さんがこんなことを言っている、それはパフォーマンスだと分かるわけですね。なぜかという、その直前まで彼は大阪府議会の定数削減の話をしてたんです。その定数削減で大バトルをやっているわけですけども、世の中東日本大震災一色というわけでありまして、あまりクローズアップされてこない。で、おそらくこれはパフォーマンスとして言ってるんだなと思ったんですが、その言い方が良くなかったんですね。「鳥取県なんか人口60万人でしょ、あんなとこ県議の数は6人でいいんですよ。」とか言ったわけなんですね。これを言い出すととんでもないことになるわけでありまして、徳島県は8人でいい、和歌山県は10人でいい、滋賀県は11人でいいという話になるわけでありまして、我々以上にそういった県も影響を受けるわけでありまして、まあ暴論なんですよ。実は大阪の定数は東京に併せて作ろうとした、東京に併せて作ろうとすると大阪は減らさないといけない、その減らすためにやるわけでありまして、東京と同じ基準で全国の都道府県をやっけしおおうとすると無理があるわけです。もともとこれは勝ち目がない戦なんですね、橋本さんにとっては。だから本気で言ってるんじゃないだろうと。耳目を引きつけるために言ってるんだらうと思ったんですが、記者会見を開いてくれということで、じゃやみましょうと、オープンな鳥取県ですからね。それで言葉を選んで言うわけですね、橋本さんは大阪府議会の定数問題やるんですから一生懸命やってもらったらいんですよと、鳥取県のことについては先般定数削減やりました、今35人に減ったとこなんですね。35人に減るといって答を出して努力しているところで、それから小さなところでこそできるデモクラシーがあるんじゃないかとかこういうすじ論をいうわけです。ところがメディアの皆さんは満足しないわけですね、なぜなら彼らも

頭に来てるから、「鳥取県なんか。」なんて言われてですね、マスコミは結構盛り上がってるわけですよ、で東京の方のメディアの方から指令が来てるんですね、こんなコメントを取れと。そういうコメントらしいコメントを取りたくて来てるもんですから満足しない。こちらも言い方を変えながら言うわけでありますが、大阪のことを一生懸命橋本さんはやっていたらいいんですよ、鳥取のことは余計なお世話ですっていったんですね。そしたらテレビに出たのは最後の“鳥取のことは余計なお世話です”のわずか数秒が繰り返し出まして、そしたら橋本さんがカンカンになったみたいですね。そのあとまた記者会見やると言っていて、2時間も勉強して1時間も記者会見の時間を遅らせて出てきまして、色んなことをおっしゃるわけです。これはもうバトルが果てしないなどこっちも色々聞かれるもんで、それじゃ関西広域連合の委員会の席で話しあったらいいんじゃないですかというメッセージを出しましてですね、どこかで決着をつけないといけないなど。なぜかという鳥取県が悪者になる可能性がある、というのは今のメディアというのは、マスメディアといいますか、非常に恐ろしいところがありまして、人気者に弱いんです。ネームバリューがある人の発言の方に吸い寄せられる傾向があるんですね。あんまり長いことこのバトルをやってますと、鳥取ってけしからんところだっていうことになってしまう可能性もある。だから法律的にはこちらの勝ち目が絶対にあるんですけども、ただどこかで幕引きをやった方がいいというふうにこちらも考えるわけです。それで関西広域連合の席でという話にしましたら、冒頭テレビ会議で、私は行けませんでしたからこちらから参加したんですけども、橋本さんがはじめに手を挙げられまして、これシナリオと違うんです。橋本さんは、オフレコの席の時に発言したいということで、事前に関西広域連合の中で調整されてたんですね。そう思ったらテレビ会議でみんなが見てるところで、最初に冒頭で手を挙げて、平井知事に発言させてくれて手を挙げたんです。関西広域連合長の井戸さんが苦々しい顔をしながら当てるわけですね。みんながどうなるんだろうって見守ったんですが、向こうからなんとすいませんでしたと謝っちゃったもんで、事なきを得たといいますか我々としては、一番良い形で収まったということなんですよ。2回目の当選を果たした平井でございますけれども、この瞬間が一番評価してもらえましたね。歴代の鳥取県知事で大阪府知事に謝ってもらったのは、私が初めてでございます。そんなようなことで溜飲を下げた県民の方が多かったようで、これは非常に評価されたんですけども、少し話しがそれましたけれども、そういうことでクローズアップされて維新の会を立ち上げられた。これは決められない国政に対するアンチテーゼなんですよ。私たちは、60万人、58万人という小さな県だからこそできるデモクラシーがあるんだと、それで現場でできることをどんどんやっていけばいいんだと、こういうことが評価され始めているというパラダイムシフトが起り始めていると思います。

そういう中で地方分権ということが語られるんですが、地方分権が目指すものというのは何か。これは“地方分権”という言葉ができたことに遡っていけばいいわけで、言葉ができた頃、実は行政改革をやっていたんですね。行政をダウンサイジングをしよう。そうするとサービスが低下するというので、当時熊本県の知事だった細川護熙さんが座長になって暮らしを豊かにする部会というもので、この考え方を出されたんですね。どういうことかといいますと、ローカルオプティマムという概念で地方それぞれで選択して一番良い形をすればいいじゃないかと、それを積み上げて行けばたとえ全体のパイは小さくなるんですが、お金は掛けなくとも満足度は高まるだろうと、これが地方分権の考え方なんです。だからその前提には、一つは住民が参加して自分

たちで一番納得性のあることを決めていく、選択の優先順位を付けていくということが必要だろうと。このデモクラシーの契機というのが絶対必要なんですね、地方分権には。もう一つは、我々職員の資質、自治体の能力、このことが絶対に必要なんです。この二つが相まって行かないと地方分権の目的は達せない。すなわち暮らしが豊かになるところにつながっていかない。単なる権限配分、ぶんどり合戦ではあってはいけないということなんです。

また、成熟期を市民社会が迎えてきた。実は私たちが仕事をしていて良くわかるんですが、NPOだとかボランティアの方がどんどんと高まってきている。鳥取県も平成13年にNPOの条例を作りまして、今特にここ数年ですね、街づくり系で非常に盛り上がりを見せている。私も就任して今年5年なんですけど、やり方は変わっています。単に企業やNPOが自立するということがじゃなくて、それを応援してあげる。それをどんどんと火のごとくあちこちにエネルギーをつくって行く必要がある。こういうようなことを考える。そのためにその前提としての市民社会の成熟度は確実に高くなっていく。そうすると私たちが、今まで古くからある、やってあげる、あるいは出てきた意見を聞いてあげる、良い事業があったら補助金を付けてあげる、こういう姿勢ではダメだということなんです。むしろ市民の皆さんと一緒にあって、一緒になってものごとを前へ進めて行きましょう。お互い経費を分担しあうこともあると思います。あるいは行政の部分をダウンサイジングさせてですね、我々の経費を切り詰めて、向こうにやってもらった方がよっぽど良い仕事になるということも可能かと思えます。こういうパートナーシップを組んでいく時代が変わりつつあるということですね。

それから、国の形を変えていく、地方が引っ張っていく時代にしていかなければならないということだと思います。こういう分権の契機が今前へ前へと進み始めている。そういう中で地方出先機関の整理問題ですね、この度国の方針が出ましたが、全然不十分です。まだまだこの議論収まらないと思いますが、とにかく動き始めているということでもあります。

皆さんは、大きな県庁という組織に入ってくることになります。官僚組織なんですけど、これはマックス・ウェーバーが言うビュロクラシーの世界、これは不合理な言葉として官僚組織と言われますが、実はとても合理的な面があります。例えば分業で、仕事を分担します、それで専門性の高い仕事の集団で行う。それをコマンド、命令の連鎖というものをつくってハイエラキーこういうピラミッド構造にしまして、いったん指令が発せられますとそれが、ずっと組織の末端まで瞬時にして行く。そこに専門性の高い職員がいれば、一番良い仕事ができる。実は軍隊の組織がその見本なんだそうなんですけれども、そんなことで設計された組織でありますから、ある意味合理的な面がある。また、誰がそこに入っていても良いように公式化といいますけど、フォーマライゼーション、仕事のやり方を定例化してしまうんですね、いわばマニュアル化をする、誰がやっても良いという世界にする。しかし、この環境性の良さというものが、確かに威力を発揮する場面もあるんですけども、硬直的な場面もあるわけですね。例えば、今申し上げたフォーマライゼーション、公式化、マニュアル化ということをしていいますと、全然動きがなくなる、判断しなくなる、自分の頭で、そうすると一番大切な現場に適応していくという能力を失ってしまうということになります。また、命令の連鎖が仕掛けられていますが、下から上へのコミュニケーションだとか特に横の連絡が不得手になる。そういうことが出てくる。こういった弊害が色々ありますので、組織の変貌が求められてきていると思います。鳥取県でも実はそういうことをやっています。色んなプロジェクトチームが今あるんですね。横につながってこうという、横断的

な作り方を色んな仕事のやり方を変えています。他の県から出向してきた人なんか、びっくりされることもありましてですね、こないだもある来られた方がおっしゃってたんですけども、「鳥取県はだいぶ仕事のやり方が変わりました。うちの県の10年先を行っています。それは、隣の部局の人と自由に話ができる、これは凄いことですね。」と、従来考える組織と違う考え方の組織、こういうものは絶対に必要だと思います。

また、コミュニケーションのあり方も考えなければいけない。このコミュニケーションは果たして良くなっているのか、悪くなっているのかっていうのは良く分からないところがあります。今、入庁されますと全てコンピュータの端末が配られます。全部ネットでつながってるんですね。ですから効率よく仕事ができます。私はそういうことはやりませんが、橋本さんなんかが好きでやるようなんですけれども、全庁に一斉メールを送ろうと思えば送れるんですね。そういうことを、みなさんだってできるんです。全部局に周知したいと思えば、インターネットで一瞬にして伝えることができる。また、図表なんかも取り込みながら高度なコミュニケーションを図ることができる。だからコミュニケーションは進化している。ただ、退化している面もあるんですね。今日は皆さん相對して話をしています。こうやって相對で話をする事で初めて相手の表情が読めるわけですね。こうやって見ていて、この人どう考えているのかなとかある程度分かるんです。目線を見ていると良く分かります。今年の新規採用の皆さんは去年より熱心だなあとか、あそこでたるんだ奴がおるなとか良く分かるんです。それは相對のコミュニケーションの良いところでありまして、文字にするコミュニケーションと違ったコミュニケーション、インフォーマルなコミュニケーションができるわけですね。そういうことが今失われがちなんです。職場に入って見て、みんなじいっとパソコンを見て、それと、隣の人ともひよっとするとメールでやりとりする、こんな馬鹿げた世界はないわけでありまして、みんなが話したいときに話そうと、こういう当たり前のことをやろうと鳥取県で今進めているところなんです。D oプロジェクトとか、G o G oプロジェクトとか色んなことも進めています。他の県庁とは違ったこういったコミュニケーションをしていこうと。大企業のトヨタさんなんかでも最近、運動会を復活させるとか、海外でも盆踊大会をやるとかですね、そういうことなんです。一時期そういうものは廃止されてきましたが、鳥取県でも今、運動会的なものとか東部、中部、西部、それぞれ復活をさせてきています。もういちど、こういうヒューマンネットワークとしての組織を考えないといけないんじゃないか、こういうことだと思います。

決定の仕方というのも変わって来なければなりません。弊害があるんです。組織で仕事をしていけば、良い仕事ができるかという必ずしもそうではないんですね、例えば、分析麻痺症候群という言葉があります。アナルシスパラルシスシンドロームということなんですけども、どういうものかと言いますと、大企業さんなんかもそうなんです、今日本の企業は活力を失ったのはそうなんじゃないかなと思うんですけども、失敗を恐れてみんなで色んなことを探しあう、みんなが検討するなかで、どんどん微に入り細に入り分析を重ねて行くわけです。そうすると必ず問題点がでてきて、立ち止まってしまう。これは本当に県庁も含めて多いです。プラスかマイナスか比較してみて、プラスならやってみようというのが普通の考えだと思うんですけども、マイナスがちょっとでもあればやめてしまおうと、失敗を恐れるあまり、そういうふうになりがちなんです。これは冒険精神というか実証実験という場を失ってしまうということになります。私は、プラス思考で行くのであれば、失敗を恐れずにやるということが必要だと思います。例えば

こんな社会実験をやった学者がいます。何人かのグループをつくりまして、そのグループで話しあって結論を出させるんですね。それでクイズを出すわけです。そのクイズの正答率、もちろん一人ひとりでも違うと思うんです。一人ひとりでも調べてみると、それからみんなでやらせてみるというので、どちらが成績が良いと思いますか。これ実はですね、皆さんの想像と違うことだと思います。みんなでやらせた場合ですね、その正答率というのは、その6人なら6人でその6人の平均を若干上回る程度なんですね。これは、ベストなんですか？違うんですね。皆さんが、三人寄れば文殊の知恵と思っているのは、一番いい文殊の知恵をもらえると思ってるんですけど、実は違うんです。平均的な姿になります。本当に成績の良い人はいます。その一人ひとりのなかでね、その成績の良い人の方がずっと上にくるんだと、これが実験の成果なんですね。だから、話し合えば必ず良いということになるということではなくて、話し合うのであれば、本当にベストのことをみんなでやらないといけないということなんです。要は組織の和とかね、そういうところにとらわれてしまうことがダメなんですね。集団思考（グループシンクシンドローム）という言葉もあるんですが、集団思考に陥ってしまわないように、和の論理、グループ内の論理というのが、先行しかねないということがあるんです。こういうことを打ち破っていく若い感性っていうものが、私は必要なんだと思います。

これから、県民、地域に捧げて、挑戦者としてやっていかないといけない。特に挑戦者（チャレンジャースピリッツ）が皆さんに求められると思います。鳥取県庁にも求められます。なぜかという、我々のような小さな地域、なんせ全国で一番少ない人口規模ですからね。コマーシャルを見ても、鳥取砂丘では、まだ糸電話を掛けていると思われているんですから。そういう我々の小さな世界であるからこそ、取り残されがちになるんです。立ち止まっていたら確実に時代遅れになってしまう。むしろ、小さいからこそ小回りを生かして、先頭に立つようにできないだろうか、そうすれば、むしろ鳥取県の方に強い力が生まれてくるのではないかと思うわけです。職場のなかでも、議論が先行するのではなく、実践行動であり、未来志向であり、こういうことが大切でありますし、住民の目線や地域との連携というものを大切にする、そういうことで、だいぶ鳥取県庁も変わり始めましたけれども、皆さんも是非その性質を伸ばしてもらいたいと思います。

そういう中ですね、例えば、今雇用が足りない、こういう状況にあります。若い人たちが帰ってくる職場がない。皆さんは今回、いい具合に県庁関係の職場に就かれましたが、実は就けない方もたくさんいる。そういう人たちのことも考えてですね、もっともっとこの地域のなかで雇用の受け皿をふやそうと、そのためには先端的な産業、ローテクでいいんです、農林水産業でもいいんです。今ここ数年、ここ2年ほどで300人とかいうオーダーで新規の就農者が来てるんですね。今までなかったことです。これ実はさっき言ったパラダイムシフトが起こってまして、都会で就くよりはこういう地方で住んでみたい、また、自分自身大きな組織の中で心の病を持つようなそういうストレスにさらされるよりは、生き活きとしてですね、梨を作ってみたい、牛を育ててみたい、そういう人たちが確実に増えています。その受け皿として鳥取県が初任給並みの給料を保証できるような補助金を出している。これ全国に先駆けて始めましたところ、今、特に鳥取県では農業従事者のアグリスクールを作ってるんですけれども、そういうところに研修で入ってくるのも試験で入ってくるぐらいになってましてですね、募集をかけますと大学院卒業者とか大卒ばかりです。そんなような時代になってきてるんです。昔とは違うんです。そういうこ

とですから、そういう農林水産業なんかも含めて、就労を増やしていくということがひとつには大切ではないかと。

また、環境イニシアチブ。私も孫正義社長と掛け合いましたですね、メガソーラー発電所を30メガワット、全国でも最大級のメガソーラー発電所を今鳥取県内に作ろうというプロジェクトを進めています。

また、日本海側が長く“裏日本”と呼ばれるようになってきましたけれども、そうではないんだと。皆さんも日本地図を思い浮かべていただければ発想の転換が図れると思います。表日本と呼ばれている東京の先にはどんな世界があるでしょう？太平洋ですね、遥か向こうの方に行くとアメリカがある。確かにアメリカの方を向いていると表かもしれません。しかし、むきばんだ遺跡だとか、あるいはとなりの加茂岩倉遺跡なんかもそうなんですけども、そうした遺跡のようすをみてもらえばわかるように、2000年前は、ここは大陸と交易をしていた場所なんですよ、こっちが表玄関、今アジアに経済の中心が移ってきているわけでありますから、アジアが一番近いところが本来は玄関になるべきだと、今北東アジアのゲートウェイを我々目指して、いわば日本をひっくり返していくことができるんじゃないかと、いまこれに共感してヤマトホールディングスが全国で初めて、山陰は米子にですね事業所を開きました。新しいタイプの貿易を促進しようという事業所なんです。こんなようなパラダイムシフトが起こってきている、それを何とか実現していくことが必要だろう。

また地域における絆を活かしていく。鳥取県は34.5パーセントという全国でもナンバーワンのボランティア従事率なんです、総務省の調査にそういう風にできています。こういうような気質を生かして、中山間地でもお年寄りを見守るような活動をしようじゃないかと、企業にも呼びかけました。40の事業所がですね、今これに当たっていただいているわけでありますけれども、全国でも珍しい中山間地見守り協定というのをやっています。そしたら鳥取県では消えてしまった高齢者というのはいないんです。東京とか都会で問題になりましたけど、そういうものがないんです。このようなことが起きてきていまして、支え愛の基金を今年から20億円積んで、新しい支えの事業を始めようとしています。

また人材とっとり、全国に先駆けて小中学校の全学年で少人数学級の導入をこの4月からいたしました。鳥取環境大学という新しい公立の大学も誕生しました。地域の中で人材を鍛えていく、それが人口が少ない県のプラスメリットにしたいと思います。

また夢や未来を感じてもらえるように、まんが王国を建国しようじゃないかと、今年はそういう壮大なプロジェクトへと乗り出しました。そのまんが王国でやりたいのは、温泉だとかおいしい食べ物というのだけでなく、ほかの地域と差別化したことによって国際的なリゾートが目指せないだろうかというところなんです。また、若い人たちもクリエイティブな仕事は大好きでありますけども、こういう人材を養成をしていく場になったり、ビジネスを起こしていくことができないだろうか、こんなことを目指して、発想の転換を図ろうとしています。鳥取県は水木しげるロードがございまして年間300万人を超える方がやってこられる、砂丘の倍来るようになったわけです。そういうような成功例があるわけですから、それを他にも広げていこうとしているわけであります。

そういう様々な地域づくりを仕掛けていく際には、是非皆さん、パートナー県政ということを考えていただきたいと思います。鳥取県は全国ナンバーワンの透明度を誇っているわけでありま

す。“魚を得るのは網の一目によれば、衆目なくんば、これを得ること難し”と、魚をとるにはですね網のひとつひとつの目があるから魚が取れるわけで、網を使うわけではありますが、その網の一目一目がたくさんの目があるからこそ初めて魚が取れる、いわばみんなが力を合わせることによって大きな力、大きな成果が得られる、これは北畠親房の言葉ですが、そういう鳥取県らしいパートナー県政ということを実現することによって、未来志向、行政の地平を開いていきたいという風に思います。

最後に、志賀直哉の言葉を付けさせていただきましたけれども、暗夜行路に出ていますように、大地を一步一步踏みしめて、気分よくですね、手を振って皆さんには歩んでいただきたいと思います。みなさんのこれからの人生、多くの県民の皆さんの笑顔を得ることによって喜びに満ちたものになりますように心からご祈念申し上げたいと思います。そして、健康管理は大事です。これは体の健康もそうでありまして、心の健康もそうでありまして。「人生の目的は健康ではない、しかしその前提なんである。」と、このように武者小路実篤は言っているわけではありますが、そのとおりだと思います。活躍する第一歩としてですね、もし不調を感じたらまわりの人にも訴えて、周りの人たちにもケアしてもらえる、そういう体制ができていますので安心して、スタートを切ってもらいたいと思います。皆様のご活躍を心から期待申し上げ、私からのメッセージにさせていただきます。どうもありがとうございました。